

人形の祠
泉鏡花作

「いまの、あの婦人が抱いて居た嬰兒ですが、鯉か、鰲でも有りさうでならないんですがね。」

「私は、黙つて工學士の其の顔を見た。」

「まさかとは思ひますが。」
赤坂の見附に近い、唯ある珈排店の端近な卓子で、工學士は麥酒の硝子杯を控へて云つた。

私は卷苜を點けながら、
「あゝ、結構。私は、それが石地藏で、今のが姑護鳥でも構ひません」けれども、それぢや、貴方が世間へ濟まないでせう。」

六月の末であつた。府下澁谷邊に或茶話會があつて、斯の工學士が其の席に臨むのに、私は誘はれて一日出向いた。

談話の聽人は皆婦人で、綺麗な人が大分見えた、

と云ふ質のであるから、羊羹、苺、念入に紫袷紗で
薄茶の饗應まであつたが――辛抱をなさい――
酒と云ふものは全然ない。か、豫ての覺悟である。
それがために意地汚く、歸途に憊うした場所へ立寄
つた次第ではない。

本来なら其の席で、工學士が話した或種の講述を、
こゝに筆記でもした方が、讀まるゝ方々の利益なの
であらうけれども、それは殊更に御海容を願ふとし
て置く。

實は往路にも同伴立つた。

指す方へ、煉瓦塀板塀續きの細い路を通る、とや
がて其の會場に當る家の生垣で、其處で三つの外圍
が三方へ岐れて三辻に成る
で、日蔭の泥濘の處が――空は曇つて居た――
残の雪かと思ふ、散敷いた花で眞白であつた。

下へ行くと學士の背廣が明いくらゐ、今を盛と空
に咲く。枝も梢も撓に満ちて、仰向いて見上げると

屋根よりは丈伸びた樹が、對に並んで二株あつた。
李の時節でなし、卯本に非ず。そして、木犀のやうな甘い匂が、燻したやうに薫る。橢圓形の葉は、羽状複葉と云ふのが眞蒼に上から可愛い花をはら／＼と包んで、鷺が緑なす蓑を被いで、イみつゝ、颯と開いて、雙方から翼を交した、此翼連理の風情がある。

私は固よりである。

學士にも、此の香

木の名が分らなかつた。

當日、席でも聞合せたが、居合はせた婦人連が亦誰も知らぬ。其の癖、佳薫のする花だと云つて、小さな枝ながら硝子杯に挿して居たのがあつた。九州の猿が狙ふやうな裋の媚かしい姿をしても、下枝までも届くまい。小鳥の啄んで落したのを通りがゝりに捨つて來たものであらう。

「お乳のやうですわ。」

一人の處女が然う云つた。

成程、近々と見ると、白い小さな花の、薄りと色着いたのが一ツ一ツ、美しい乳首のやうな形に見えた。

却説、日が暮れて、其の歸途である。

私たちは七丁目の終點から乗つて赤坂の方へ歸つて来た。あの間の電車は然して込合ふ程では無いのに、空怪しく雲脚が低く下つて、今にも一降來さうだつたので、人通りが慌しく、一町場二町場、近處へ用たしの分も使つたらしい、停留場毎に乗人の數が多かつた。

で、何時何處から乗組んだか、つい、それは知らなかつたが、丁ど私たちの竝んで掛けた向う側――墓地とは反對――の處に、二十三四の色の白い婦人が居る

先づ、色の白い婦と云はう、が、雪なす白さ、冷さではない。薄櫻の影がさす、臙に香ふ装である。こんなこそ、膚と云ふより、不寐ながら肉と言はう。其胸は、合歡の花が零しさうにほんのりと露である。

藍地に紺の立絞の浴衣を唯一重、絲ばかりの紅も

見せず素膚に着た。襟をなぞへに膨りと乳を劃つて、
衣が青い。青いのが葉に見えて、先刻の白い花が倂
立つ。撫肩を絶げに落して、すらりと長く
膝の上へ、和々と重量を持たして、二の腕を撓やか
に抱いたのが、其が嬰兒で、仰向けに寝た顔へ、白
い帽子を掛けてある。寝顔に電燈を厭つたものであ
らう。嬰兒の顔は見えなかつた、だけ其だけ、懸念
と云へば懸念なので、工學士が――鯉か鼈か、
と云つたのは此であるが

此の媚めいた胸のぬしは、顔立ちも際立つて美し
かつた。鼻筋の象牙彫のやうにつんとしたのが難を
言へば強過ぎる。かはりには目を恍惚と、
何か物思ふ體に仰向いた、細面が引緊つて、口許と、
もに人品を崩さないで且つ威がある。其の
顔だちが帶よりも、きりりと細腰を緊めて居た。面
で緊めた姿である。皓齒の一つも莞爾と綻びたら、
はらりと解けて、帶も浴衣も其のまゝ消えて、膚の
白い色が颯と簇つて咲かう。霞は花を包むと云ふ
が、此の婦は花が霞を包むのである。膚が衣を消す
ばかり、其の浴衣の青いものにも、胸襟のほのめく色

はうつろはぬ、然も湯上りかと思ふ温さを全身に漲らして、髪かみの艶つやさへ滴したゝるばかり濡々として、其それがそよいで、硝子窓ガラスまどの風かぜに額ひたいに絡まつはる、汗あせばんでさへ居あたらしい。

ふと明あいた窓まどへ横よこむ向きに成なつて、ほつれ毛けを白しろく々とした指ゆびで搔かくと、あの花はなの香かが強つよく薫かをつた、と思おもふと緑みどりの黒髪くろかみに、同おなじ白しろい花はなの小枝こえだを活いきたる暮つてな、湧立わきたつ蕊しべを揺ゆるがして、鬢びんに插さして居あたのである。

唯と、見みた時とき、工學士こうがくしの手てが、確しかと私わたしの手てを握にぎつた。

「下おりませう。是非ぜひ、談話はなしがあります。」

立たつて見送みおくれば、其その婦をんなを乗のせた電車でんしゃは、見附みつけの谷たにの窪くぼんだ廣場ひろばへ、すら／＼と降おりて、一度ど暗くらく成なつて停とまつたが、忽たちまち風かぜに乗のつたやうに地盤ぢばんを空そらざまに颯さつと坂さかへ、辻すべつて、青あをい火花ひばながちら／＼と、櫻桜の街樹なみきに搦からんだなり、暗夜くらがりの梢こずえに消きえた。

小雨こさめがしと／＼と町まちへかゝつた。

其處そこで珈琲店コオヒイテンへ連立つれだつて入はいつたのである。

生いで、其その當時たうじは、近きん縣けんに賣ばい藥やくの行ぎやう商じやうをした事ことである。
こゝに、一寸ちよつ斷ことわつておくのは、工こう學がく士しは嘗かつて苦く學がくせ

「利根川の流が汎濫して、田に、畠に、村里に、其の水が引残つて、月を経、年を過ぎても涸れないで、其のまゝ溜水に成つたのがあります。」

小さなのは、河骨の點々黄色に咲いた花の中を、小兒が徒に猫を乗せて盪を漕いで居る。大きなのは汀の蘆を積んだ船が、棹さして波を分けるのがある。千葉、埼玉、あの大河の流域を辿る旅人は、時々、否、毎日一ツ二ツは度々此の水に出會します。此を利根の忘れ沼、忘れ水と呼んで居る。

中には又、あの流を邸内へ引いて、用水ぐるみ庭の池にして、筑波の影を矜りとする、豪農、大百姓などがあるのです。

唯今お話をする、私が出會ひましたのは、何うも庭に造つた大池で有つたらしい。尤も、居周圍に柱の跡らしい礎も見當りません。が、其とても埋れたのかも知れませんが、一面に草が茂つて、

曠野あれのと云いつた場所ばしょで、何故なぜに一度どは人家じんかの庭にはだつたか、と思おもはれたと云いふのに、其その沼ぬまの眞中まんなかに拵こしらへたやうな中島なかじまの洲すが一つ有あつたからです。

で、此この沼ぬまは、話はなしを聞きいて、お考かんがへに成なるはど大おほきなものではないのです。然さうかと云いつて、向むかう岸ぎしとさし向むかつて聲こゑが届とどくほどは小ちひさくない。それぢや餘よほ程どひろ廣ひろいのか、と云いふのに、又また然さうでもない、ものゝ十四五分ふんも歩あり行ゐたら、容たやす易ひとまはく一周ひとまはりと云いつて、すぐおもに思おもふほど、狭せまいでもないのです。

と、恁かう言いひます内うちにも、其その沼ぬまが伸のびたり縮ちぢんだり、すばまつたり、擴ひろがつたり、動うごいて居ゐるやうでせう。――居ゐますか、結けつ構こうです。――其そのつもりでお聞きき下ください。

一體たい、水みづと云いふものは、一雲ひとくもの中なかにも河童かっぱが一個ひとつ居ゐて住すむと云いふ國くにが有ありますくらゐ、氣き心しんの知しれなものです。分わけて底そこ澄すんで少すこし白しろ味みを帶おびて、とる／＼と然しかも岸きしとすれ／＼に滿まん々と湛たへた古沼ふるぬまです

もの。丁ど、其の日の空模様、雲と同一に淀りとして、雲の動く方へ、一所に動いて、時々、たら／＼と天に薄日が映すと、其の光を受けて、晃々と光るのが、沼の面に眼があつて、薄目に白く人を窺ふやうでした。

此では、其の沼が、何だか不気味なやうですが、何、一寸の間の事で、――四時下り、五時前と云ふ時刻――暑い日で、大層疲れて、汀にぐつたりと成つて一息吐いて居る中には、雲が、なだらかに流れて、薄いけれども平に日を包むと、沼の水は静に成つて、そして、少し薄暗い影が渡りました。風はそよりともない。が、濡れない袖も何となく冷いのです。

風情は一段で、汀には、所々、丈の低い燕子花の、紫の花に交つて、あち此方に又一輪づつ、言交はしたやうに、白い花が交つて咲く

あの中島は、簇つた卵の花で雪を被いで居るのです。岸に、葉と花の影の映る處は、松葉が流れるや

うに、ちら／＼と水が揺れます。小魚が泳ぐのでせう。

差渡し、池の最も広い、向うの汀に、こんもりと一本の柳が茂つて、其の緑の色を際立て、背後に一叢の森がある、中へ横雲を白くたなびかせて、もう一叢、一段高く森が見える。うしろは、遠里の淡い靄を曳いた、なだらかな山なんです。――柳の奥に、葉を掛けて、小さな葭簧張の茶店が見えて、横が街道、すぐに水田で、水田のへりの流にも、はら／＼燕子花が咲いて居ます。此の方は、薄碧い、眉毛のやうな遠山でした。

唯、沼が呼吸を吐くやうに、柳の根から森の裾、紫の花の上かけて、霞の如き夕靄がまはりへ一面に白く渡つて来ると、同じ雲が空から捲き下して、汀に濃く、梢に淡く、中ほどの枝を透かして靡きました。

私の居た、草にも、しつとりと其の靄が這ふやうでしたが、袖には掛らず、肩にも巻かず、目なんぞ

は水晶すいしやうを透とほして見るやうに透明とうめいで。詰つまり、上下うへしたが白しろく曇くもつて、五六五尺水しやくみつの上うへが、却かへつて透通すきとほる程ほどなので

あゝ、あの柳やなぎに、美うつい虹にじが渡わたる、と見みると、薄靄うすもやに、中なかが分わかれて、三さんつに切きれて、友染いっせんに、鹿かお子こ、絞しぼりの菖蒲あやめを被かけた、派手はでに涼すずしい装よそほひの婦をんなが三さんにん人。

白しろい手てが、ちら／＼と動うごいた、と思おもふと、鉛なまりを曳ひいた絲いとが三條みすぢ、三處みどころへ棹さそが下おりた。

「あゝ、鯉こひが居ある

一尺しやく、金鱗きりんを重おもく輝かざかして、水みづの上うへへ翻ひら然らと飛と

ぶ。

「

「それよりも、見事なのは、釣竿の上下に、纏るゝ
 袂、翻る袖で、翡翠が六つ、十二の翼を翻すやうな
 んです。」

唯、其の白い手も見える、莞爾笑ふ面影さへ、俯
 向くのも、仰ぐのも、手に手を重ねるのも其の微笑
 む時、一人の肩をたゞくのも 蒼がひら／
 開くやうに見えながら、厚い硝子窓を隔てたやう
 に、まるつ切、聲が 否、四邊は寂然して、
 ものゝ音も聞えない。

向つて左の端に居た、中でも小柄なのが下して居
 る、棹が満月の如くに撓つた、と思ふと、上へ絞つ
 た辮が眞直に伸びて、するりと水の空へ掛つた鯉が

――

―― 理學士は言掛けて、私の顔を見て、而して
 四邊を見た。恁うした店の端近は、奥より、二階よ
 り、却つて椅子は閑であつた ー

「鯉は、其は鯉でせう。が、玉のやうな眞白な、あの森を背景にして、宙に浮いたのが、すつと合せた白脛を流す 凡そ人形ぐらゐな白身の女子の姿です。釣られたのぢやありません。釣針をね、恚う、両手で抱いた形。

御覽なさい。釣濟ました當の美人が、釣棹を突離して、柳の根へ靄を枕に横倒しに成つたが疾いか、起るが否や、三人ともに手鞠のやうに衝と遁げた。が、遁げるのが、其の靄を踏むのです。鈍な、はずみの無い、崩れる綿を踏越し踏越しするやうに、褻が縫れる、裳が亂れる 其が、やゝ少時の間見えませんでした。

其の後から、茶店の婆さんが手を泳がせて、此も走る

一體あの邊には、自動車か何かで、美人が一日がけと云ふ遊山宿、乃至、温泉のやうなものでも有るのか、何うか、其の後まだ尋ねて見ません。其が有ればですが、それにした處で、近所の遊山宿へ來て

居たのが、此の沼へ来て釣をしたのか、それとも、何の國、何の里、何の池で釣ったのが、一種の蜃氣の如き作用で此處へ映ったのかも分りません。餘り靜な、もの音のしない様子が、夢と云ふよりか其の海市に似て居ました。

沼の色は、やゝ蒼味を帯びた。

けれども、其の茶店の婆さんは正のものです。現に、私が通り掛りに沼の汀の祠をさして、

「あれは何様の社でせう。」と尋ねた時に、
「賽の神様だ。」と云つて教へたものです。今其の祠は沼に向つて草に憩つた背後に、なぞへに道芝の小高く成つた小さな森の前にある。鳥居が一基、其の傍に大なる棕櫚の樹が、五株まで、一列に竝んで、蓬々とした形で居る。
さあ、此も邸あと、思はれる一條で、其の小高いのは、大きな築山だつたかも知れません。

處で、一錢たりとも茶代を置いてなんぞ、憩む餘裕の無かつた私ですが、
然うやつて賣藥

の行商に歩行きます時分は、世に無い兩親へせめて
もの供養のため、と思つて、殊勝らしく聞えて如何
ですけれども、道中、宮、社、祠のある處へは、屹
と持合せた薬の中の、何種のか、一包づゝを備へま
した。――詣づる人があつて神佛から授かつた
ものと思へば、屹と病氣が治りませう。私も幸福な
んです。

丁度私の居た汀に、朽木のやうに成つて、沼に沈
んで、裂目に燕子花の影が映し、破れた底を中空の
雲の往來する小舟の形が見えました。

其を見棄てゝ、御堂に向つて起ちました。

談話の要領をお急ぎでせう。

早く申しませう。

其の狐格子を開けま

すとね、何うです

「まあ、此は珍しい。」

几帳とも、垂幕とも言ひたいのに、然うではない、
萌黄と青と段染に成つた綸子か何ぞ、唐繪の浮模様
を織込んだのが窓帷と云つた工合に、格天井から床
へ引いて蔽うてある。此に蔽はれて、其の中は見え
ません。

此が、もつと奥へ詰めて葉つてあれば、絹一重の裡は、すぐに、御厨子、神棚と云ふのでせうから、誓つて、私は、覗くのではなかつたのです。が、堂の内の、寧ろ格子へ寄つた方に掛つて居ました。

何心なく、端を、キリノゝと、手許へ、絞ると、蜘蛛の巣のかはりに幻の綾を織つて、脈々として、顔を撫でたのは、薔薇か堇かと思ふ、いや、それよりも、唯今思へば、先刻の花の匂です、何とも言へない、甘い、媚いた薫が、芬と薫つた。」

「―― 學士は手巾で、口を蔽うて、一寸額を壓へた――」

「―― 其處が闇で、洋式の寢臺があります。二人寢の寛りとした立派なもので、一面に、光を持つた、滑らかに艶々した、絨か、羽二重か、と思ふ淡い朱鷺色なのを敷詰めた、聊か古びては見えました。が、それは空が曇つて居た所爲でせう。同じ色の薄搔卷を掛けたのが、すんなりとした寢姿の、少し肉附を肥くして見せるくらゐ。膚を蔽うたとも見

えないで、美しい女の顔がはら／＼と黒髪を、矢張り、同じ絹の枕にひつたりと着けて、此方むきに少し仰向けに成つて寝て居ます。のですが、其が、黒目勝な雙の瞳をばつちりと開けて居る。此の目に、此處で殺されるのだらう、と餘りの事に然う思ひましたから、此方も熟と凝視しました。

少し高過ぎるくらゐに鼻筋がツンとして、彫刻か、練ものか、眉、口許、はつきりした輪郭と云ひ、第一櫻色の、あの、色艶が、――其が――今の、あの電車の婦人に瓜二つと言つても可い。

時に、毛一筋でも動いたら、其の、枕、蒲團、搔卷の朱鷺色にも紛ふ蒼とも云つた顔の女は、芳香を放つて、乳房から蕊を湧かせて、爛搜として咲くだらうと思はれた。」

四

「私の目が眩んだんでせうか、婦は瞬をしません。五分か一時と、此方が呼吸をも詰めて見ます間――で、餘り調つた顔容といひ、果して此は白像彩塑で、何う云ふ事か、仔細あつて、此の廟の本尊なのであらう、と思つたのです。」

床の下

板縁の裏の處で、がさ／＼がさ

／＼と音が發出した

彼方へ、此方へ、鼠

が、ものでも引摺るやうで、床へ響く、と其の音が、變に、凭上うへに立つてる私の足の裏を擦ると云つた形で、むづ痒がゆくつて堪らないので、もさ／＼身體からだを揺りました。――本尊は、まだ瞬もしなかつた。

――其の内に、右の音が、壁でも攀よぢるか、這上あがつたらしく思ふと、寢臺の脚の片隅に羽目の破れた處がある。其の透間へ黽いたちがちよろりと覗くやうに、茶色の偏平い顔を出したと窺はれるのが、もぞり、がさりと少しづゝ入つて、ばさ／＼と出る、と大きさがやがて三俵法師、形も似たもの、毛だらけの凝固、足も、顔も有るのぢやない。成程、鼠でも中に潜つ

て居るのでせう。

其奴が、がさ／＼と寢臺の下へ入つて、床の上を
ずる／＼と引摺つたと見ると、婦が搔卷から二の腕
を白く抜いて、私の居る方へぐたりと投げた。寢亂
れて乳も見える。其を片手で秘したけれども、足の
あたりを震はすと、あゝ、と云つて其の手も兩方、
空を掴むと裙を上げて、弓形に身を反らして、搔卷
を蹴て、轉がるやうに衾を抜けた。

私は飛出した

壇を落ちるやうに下りた時、黒い狐格子を背後に
して、婦は斜違に其處に立つたが、呀、足許に、早
やあの毛むくぢやらの三俵法師だ。

白い踵を揚げました、階段を、迂り下りる、と、
後から、ころ／＼と轉げて附着く。さあ、それから
は、宛然人魂の憑ものがしたやうに、毛が赫と赤く
成つて、草の中を彼方へ、此方へ、たゞ、伊連巻で
身についたばかりのしどけない媚かしい寢着の婦を

追廻す。婦はあとびつしやりをする、背筋を抜らす。
三俵法師は、裳にまつはる、踵を嘗める、刎上る、
身震する。

やがて、沼の縁へ追迫られる、と足の甲へ這上る
三俵法師に、わな／＼身悶する白い足が、あの、釣
竿を持った三人の手のやうに、ちら／＼と宙に浮い
たが、するりと音して、帯が、亘ると、衣ものが脱
げて草に落ちた。

「沈んだ船ー」と、思はず私が聲を掛け
た。隙も無しに、陰気な水音が、だふん、と響いた

しかし、綺麗に泳いで行く。美しい肉の脊筋を掛け
て左右へ開く水の姿は、軽い羅を捌くやうです。其
の膚の白い事、あの合歡花をぼかした色なのは、豫
て此の時のために用意されたのかと思ふほどでした。

動止んだ赤茶けた三俵法師が、私の目の前に、情
力で、毛筋を、ざわ／＼とざわつかせて、うツぷ／

喘いで居る。

見ると驚いた。ものは棕櫚の毛を引束ねたに相違
はありません。が、人が寄る途端に、ばち／＼豆を
焼く音がして、ばら／＼と飛着いた、棕櫚の赤い
は、幾千両とも数の知れない蚤の集團であつたので
す。

早や、兩脚が、むづ／＼、背筋がびち／＼、頸首
へびちんと来る、私は七顛八倒して身體を振つて振
飛ばした。

唯、何と、其の棕櫚の毛の蚤の巢の處に、一人、
頭の小さい、眦と頬の垂下つた、青膨れの、土袋で、
肥張な五十恰好の、頤鬚を生した、漢が立つて居る
ぢやありませんか。何ものとも知れない。越中禪と
云ふ あいつ一つで、眞裸で汚い尻です。

婦は沼の洲へ泳ぎ着いて、卯の花の茂にかくれま
した。

が、其の姿が、水に流れて、柳を翠の姿見にして、
ぼつと映つたやうに、人の影らしいものが、水の向

うに、岸の其の柳の根に薄墨色に立つて居る

或は又

此處の土袋と同一やうな男が、

其處へも出て来て、白身の婦人を見て居るのかも知れませんか。

私も其の一人でせうね

「や、待てい。」

青膨れが、痰の擲んだ、ぶやけた聲して、早や行掛つた私を留めた

「見て貰えたいものがあるで、最う直ぢやぞ。」
と、首をぐたりと遣りながら、横柄に言ふ。

何と、其の兩足から、下腹へ掛けて、棕櫚の毛の蚤が、うよ／＼ぞろ／＼
赤蟻の列を造つてる
私は立竊みました。

ひら／＼、と夕空の雲を泳ぐやうに柳の根から舞上つた、あゝ、其は五位鷺です。中島の上へ舞上つた、と見ると輪を掛けて颯と落した。

「ひい。」
と引く婦の聲。鷺は舞上りました。

翼の風に、卯の花のさら／＼と亂るゝのが、婦が手

足を蹴らして、身を二く一に宛然である。

今考へると、それが矢張り、あの先刻の樹だつた
かも知れません。同じ薫が風のやうに吹亂れた花の
中へ、雪の姿が素直に立つた。が、滑かな胸の衝と
張る乳の下に、星の血なるが如き一雫の鮮紅。絲を
亂して、卵の花が眞赤に散る、と其の淡紅の波の中
へ、白く眞倒に成つて沼に沈んだ。汀を廣くするら
しい寂かな水の輪が浮いて、血汐の綿がすら／＼と
碧を曳いて漾ひ流れる

「あれを見い、血の形が字ぢやらうが、何と讀む
かい。」

「私が息を切つて、頭を掉ると、
「分らんかい、白痴めが。」と、ドンと胸を突
いて、突倒す。重い力は、磐石であつた。」

「又遣直しぢや。」と呟きながら、
其の蚤の巢をぶら下げると、私が茫然とした間に、
のそ／＼と越中禪の灸のあとの有る尻を見せて、
そして、やがて、及腰の祠の狐格子を覗くのが見え

た。

「奥さんや、奥さんや　――　蚤が、蚤が　――

と腹をだぶ／＼、身悶えをしつゝ、後退りに成つた。唯、どしん、と尻餅をついた。が、其の頭へ、棕櫚の毛をずぼりと被る、と梟が化けたやうな形に成つて、其のまゝ、べた／＼と草を這つて、縁の下へ這込んだ。――

蝙蝠傘を杖にして、私がひよろ／＼として立去る時、沼は暗うございました。そして生ぬるい雨が降り出した

「奥さんや、奥さんや。」

と云つたが、其の土袋の細君ださうです。土地の豪農何某が、内證の逼迫した華族の令嬢を金子にかへて娶つたと言ひます。御殿づくりでかしづいた、が、其の姫君は可恐い蚤嫌ひで、唯一匹にも、夜も晝も悲鳴を上げる。其の悲しさに、別室の閨を造つて防いだけれども、防ぎ切れない。で、果は亭主が、

蚤のみを除よけるための蚤のみの巢すに成なつて、棕櫚しゆるの毛けを全ぜん身しんに纏まとつて、素裸すつぱだかで、寢室しんしつの縁えんの下したへ潜もくり潜もくり、一夏ひとなつのうちのに狂死くるひじをした。――

「まだ、迷まよつて居ゐさつしやるかなう、二人ふたりとも

――旅たびの人ひとがの、あの忘わすれ沼ぬまでは、同おなじ事ことを度々たび／＼

見みます。」

旅籠屋はたごやでの談話はなしであつた。」

工學士こうがくしは附つけたして、

「祠ほらの其その縁えんの下したを見みましたがね、

御存ごぞんしですか 異類いるゐいぎやう異形いしな石いしが

ね。」

日ひを經へて工學士こうがくしから音信おとづれして、あれは、乳香にうかうの樹きであらうと言いふ。

【完】